

陶芸教室とゼミ活動

森 大 樹*

Pottery Class and Seminar Activities

Taiju Mori

【キーワード】陶芸, 保育, ゼミナール, ドキュメンテーション, ICT
Pottery, Nursery School Teacher, Seminar, Documentation, ICT

1. はじめに

本学幼児教育科の2つのゼミナールでは、三重県伊賀市の陶芸教室に行き、陶芸を学ぶ授業として取り組んでいる。これは2021年から始めたものであり、今年で2年目になったこともあり、保育を専門に学ぶ学生が陶芸教室を受講し、陶芸を学ぶ意義についてまとめることに取り組んでみたい。

私が担当するゼミナールのテーマは、「コンピュータを保育に役立てるゼミ」である。主にパソコン等のICTやカメラで撮影した写真や動画を活用して保育で活用できるような力を付けることがこのゼミの目的である。そのようなゼミでなぜ陶芸教室を体験して学ぶのかをまとめることが今回の論考の目的である。

なお、この陶芸教室に参加しているのは本学では2ゼミあり、もともと陶芸教室の体験学習を企画したのは、もう一人のゼミ担当教員であり、私は協力者としての立場で参加をさせていただいている。陶芸教室を体験する目的の他にも、先ほども述べたように、私の担当するゼミでは、ICTやカメラを活用するゼミでもあるので、写真を撮り、ドキュメンテーションの素材として活用している。この陶芸教室2年間の取り組みが経過したこともあり、ゼミ活動として陶芸教室の体験学習についての取り組みの総括を行う。

2. 2年間のゼミ活動内容

先ほども述べように、私の担当するゼミナールは、「コンピュータを保育に役立てるゼミ」というテーマでゼミナールの活動（ゼミ活動）をしている。私の担当するゼミでは、陶芸教室においては、主にドキュメンテーション作成することが目的の一つになるが、2年間のゼミ活動の中で、ドキュメンテーショ

所属および連絡先
*大阪千代田短期大学

ンの位置づけを行い、ゼミ活動のまとめともしたいと考えているため、表1として2021年度から2022年度の2年間のゼミ活動をまとめる。(2022年度は予定を含む)

表1 ゼミ活動内容「コンピュータを保育に役立てるゼミ」2021年度～2022年度

	内 容	詳 細
1	ゼミアルバム制作	ゼミ結成最初に、ゼミ構成員の紹介をしたゼミアルバムを作成する。
2	一眼レフカメラ、ビデオカメラ撮影、三脚の基本操作説明	写真やビデオを保育に生かすため、カメラや三脚の基本操作を学ぶ。構図や、ズーム操作、三脚の使い方を説明。
3	ゼミだより作成	毎週日直を決め、ゼミ活動の様子を写真に撮り、ゼミだよりを順番に作成する。
4	手遊び動画作成 (2021年度)	手遊びをスマートフォンで撮影し、PCに動画を取り込む。パワーポイントに手遊び動画を挿入し、字幕を入れ、歌に合わせて歌詞を出す。MP4動画汎用形式で出力する。
5	附属幼稚園運動会メダル作成 (写真の撮影と編集、印刷)	附属幼稚園の運動会メダルの中心に子どもの写真を入れるため、一眼レフによる写真撮影をする。撮影した写真を編集し、プリントアウトしてメダルの中心に貼り付ける。
6	附属幼稚園夏祭り写真・動画の撮影	附属幼稚園の夏まつりにおいて、園児がダンス等に出演する様子を写真とビデオに複数カメラで撮影。編集は卒業制作として取り組む。2021年度はコロナ禍により保護者は無観客となったため、夏祭りの様子をYouTubeライブ配信し、保護者が自宅から視聴。
7	陶芸教室 一日体験とドキュメンテーション	三重県伊賀市にある陶芸教室に行き、一日体験する。その様子を写真撮影し、後日陶芸教室の様子をドキュメンテーションとして作成する。
8	大学祭 撮影とビデオ編集	本学学園祭「小山田祭」の写真とビデオを撮影する。1回生の修了制作として、学園祭のビデオ編集をする。2022年度は複数台のビデオカメラによる編集とダイジェスト版の動画作成。
9	総合表現・劇発表会ビデオ編集	2回生科目「保育内容(総合表現)」のビデオ編集し、ダイジェスト版の動画作成をする。(1回生)
10	卒業制作(附属幼稚園夏祭りビデオ編集)	附属幼稚園の夏祭りの様子のビデオ編集し、保護者に見せる。BGM付写真スライドショーの動画作成と園児出演の様子をマルチカメラ編集する。
11	ゼミ発表会プレゼンテーション	2回生最後にゼミ発表会があり、年間活動紹介、1回生修了制作、2回生卒業制作の発表(プレゼンテーション)を行う。

3. 陶芸を学ぶ意義

将来保育者になることを目指す学生にとって、陶芸を学ぶ意義はどのようなことがあるのか。これまで2年に渡り計画を立て、実施してきたこともあり、まとめてみたい。

まずひとつは、考えらえる分野としては、造形表現としての陶芸であり、美術としての分野である。指先を使って、各自の思いを込めて形成することには意義がある。

2つめは、保育環境を通した粘土工作の一種であり、指先を使うことで脳の発達を促すこと、長時間集中することにより、ひとつのことに頑張る力が養われると考えられる。

成田(2008)は、人間の発達において感覚器官としての触覚について、次のように説明している。「感覚受容器官は、視・聴・臭・味・触の五つあるが、触を除く四つはすべて特殊感覚であり、受容器

は局所的である。一方、触覚は体性感覚に属し、皮膚の接触感覚にとどまらず、筋肉感覚や運動感覚と不可分な関係があり、全身的である。発生学的には、視・聴・臭・味の四つの感覚も、触覚が発展したものとされるが、触覚は感覚統合の基本となっており、五感の一つとして、並列的に扱われるべきではない。」このように、成田は特に五感の中でも特に感覚器官として触覚の重要性を指摘している。

本学の教員として造形表現の授業を担当した新見（2010）は、このような子どもの発達において、五感について特に触覚が重要であり、その働きが大きな比重を占める、乳幼児期の感触あそびをすすめている。多様な変化する素材を準備し、保育者自身も変化する素材となって、子どもと子どもをつなぐことの大切さを述べている。発達年齢が低いほど、可塑性に富んだ水、砂、土などの身近な素材を使って、感触あそびをすることで「人間の手」に育てることは、大人や保育者の役割であると述べている。

さらに新見（2010）が次のように述べている。「手が豊かに働いている」、ということは、“脳がゆたかに働いている”ことであり、“発達の土地が肥えている”ことを示すもの、といえる。」そんな意味を込めて、「手、ゆびは“外に突き出た脳”である」、脳をみがくためには、その出先機関である「手・ゆび・足・口・感覚器官をみがけ」と言われる所以である。

陶芸を学ぶ意義として、地域の文化を継承発展させることがある。文化は一日にしてなるものではなく、長い歴史を通して形作られる。陶芸も同様であり、陶芸を学ぶ意義は、これまでの日本の文化の歴史を学ぶことであり、先祖の人たちが受け継いできたことを短時間ではあるが、学ぶことが重要である。特に陶芸は地域に根差した特性があり、地域の歴史を学ぶきっかけにもなる。このように文化を継承することは、保育にとっても重要である。新しい分野を開拓し、学んでいくこと同様に、過去から学ぶことは将来の保育者にとって重要である。

4. 小学校カリキュラムにおける陶芸

現在、小学校カリキュラムにおいて陶芸をテーマとした授業が多く実施されている。可塑性に富む粘土は、優れた表現・加工材料であり、各年齢・発達段階に応じて取り組むことができる優れた教材でもある。現在の日本の小学校で使用されている図画工作の教科書では、各学年で粘土を用いた題材が掲載されている。焼き物づくりは高学年の教科書で取り扱い、作成方法や焼き方を含めた陶芸の工程等が掲載されている。

浅海（2009）が述べるように、多くの小学校で焼き物づくり等の陶芸学習が取り組まれている。しかし、多数の児童が陶磁器の文化に対して関心が低く、また陶磁器の粘土素材や焼き方についての差異に十分理解していない実態があることを指摘している。小学校の授業では、焼き物の素材となる粘土の性質、陶器と磁器の違い、様々な技法等を体験的に楽しみながら理解させるプログラムを作成して実践している小学校もあるようである。

本学の位置する大阪府河内長野市の小学校でも、5年生の修学旅行において信楽焼の陶芸体験学習が取り入れられているとのことである。信楽焼の陶芸教室を半日程度体験学習し、作品を完成させて、後日児童が作成した焼き物を受け取ることができるようになっている。

5. 伊賀焼の歴史

古い歴史を持つ伊賀焼は、安土桃山時代に茶道の世界に取り入れられ、焼き物の生産が盛んになったと言われている。牧野ほか（1992）は、『江戸時代 人づくり風土記 24 三重』において次のように述べている。

伊賀焼の里、阿山町丸柱は、滋賀県境の三重県伊賀北西部にある。隣の滋賀県信楽町も信楽焼の産地として有名である。伊賀焼や信楽焼の生産は、他の須恵器系の窯と同じように、平安時代から鎌倉時代に始まったとされている。この時代の中世期の伊賀焼と信楽焼は生活文化圏が同じであり、元来同一の窯業地域として発展してきたこともあり、明確に区別できないようである。

安土桃山時代になり、伊賀焼が茶道の世界に取り入れられることで、「茶陶伊賀焼」として花生や水指等が生産されるようになった。1585（天正13）年頃、筒井定次が伊賀国の領主となった時期から、茶陶伊賀焼の生産に力が入られるようになったと言われている。この領主筒井定次が古田織部の弟子であり、すぐれた茶人でもあった。そのため、定次は熱心に茶陶伊賀焼を生産し、伊賀上野城内にも窯を建造したと言われている。伊賀焼の作風は、古田織部に指導を受け、織部好みの焼きものが多く作られている。現在、五島美術館に所蔵されている伊賀焼水指「破袋」（図1）は、当時の伊賀焼の代表的な作風として知られている。



図1 伊賀耳付水指「破袋」（谷本（2009）『伊賀焼—伊賀の七不思議』より）

1608（慶長13）年、筒井定次は領地没収され、代わって藤堂家が伊賀国の領主となった。とくに2代目藩主である藤堂高次は伊賀焼の生産に力を入れ、陶土の保護や窯燃料確保のために、お触れを出し、京都から陶工を呼び寄せ、丸柱村の陶工らに新しい技法を学ばせている。このこともあり、京風の雅やかな伊賀焼になったようである。この時代の伊賀焼は「藤堂伊賀」と呼ばれている。

このように領主からも保護され奨励されてきた伊賀焼ではあったが、1639（寛永16）年に諸大名の奢侈が禁止され、茶の湯も制限をされると、茶陶伊賀焼は不況のために廃業するところも出てきたとのことである。これらのことから、17世紀には茶陶伊賀焼として隆盛を誇ったのではあるが、これ以降は生産の中断を余儀なくされ、「古伊賀」の時代が終焉する。

「古伊賀」の終息から、百年程度経過し、7代目藩主高豊（高朗）の頃に、伊賀焼が復興したと言われている。しかし、尾張瀬戸から陶工を招聘し指導を受けたこともあり、以前のような茶道で使用する須恵器系の陶器ではなく、いわゆる瀬戸物として、日用雑貨の壺、徳利、皿、鉢等を量産し、復興したとのことである。これ以降の江戸時代から明治にかけて、伊賀焼の生産基盤が確立され、多くの伊賀焼陶磁器が生産されるようになった。

6. 保育におけるドキュメンテーション

ドキュメンテーションとは、子どもたちのテーマ活動の過程において保育者が子どもの特徴ある言葉を記録し、活動の様子を写真に記録し、省察を添えて作成した文書のことである。白石（2013）が述べるように、ドキュメンテーション作成は保育者の任務であり、子どもの理解をより深め、実践を振り返り、保育の質を向上させる機会となる。また、保育者のチームがクラス活動や計画について、話し合う資料にもなり、子ども・保護者・保育者の三者をつなぐ役割を果たす。子どもたちもそのドキュメンテーションを見ることで、体験したことを思い出して話し合うことができ、保護者は子どもたちがどんな体験をしているか写真を通して具体的に知ることができるようになる。

白石（2018）によれば、スウェーデンにおいてドキュメンテーションとは、子どもの活動や保育実践を可視化した「記録文書」のみを意味するものではなく、それに関連する様々な教育的活動も含む言葉であり、スウェーデンでは、この教育的な活動を「教育的ドキュメンテーション」と呼んでいる。

スウェーデン学校庁発行の手引書によれば、教育的ドキュメンテーションは、保育者同士、または保育者と子どもの対話と反省による教育的活動としている。ドキュメンテーションの始まりは、保育者が子どもたちの間で起こっていることを記録し、見える形式にすることから始まる。次に、その記録（ドキュメンテーション）を資料として、子どもたちと起こったことを振り返り、話し合う。子どもも大人もその出来事に関わったすべての人は、写真や記録を通して、その出来事を追体験し、再び取り組むことができるようになる。その続きとして、保育者は子どもたちの疑問や問題解決のために環境をどのように整えるかについて計画を立てることができる。

このように教育的ドキュメンテーションは、子どもの中に起こった出来事とその後につながることをつなぐ行為や方法であり、子どもとの活動を前進させる活性剤として機能する。つまり、教育的ドキュメンテーションとは、単なる保育を可視化した記録ではなく、教育的に活用する意味を含む用語である。

また、大豆生田（2020）が次のように指摘している。わざわざ写真撮影してまで記録をすればただでさえ忙しい保育者がさらに忙しくなるだけではないのかと疑問をもつ。しかし、ドキュメンテーションを実践している保育者は、保育者自身が驚き、感動しながら子どもの魅力を発見し、ドキュメンテーションを作成している場合には、余計な負担と感じてはいないということである。

写真を前にして語り合うと子どもの姿がよく見えてくることが実感できるという。写真付きの保育ドキュメンテーションを保護者に見えるところに掲示すると、保護者からの反応が起りやすくなる。保育中の子どもたちの「はやり」の活動を写真付きで見ること、保護者と保育者や、保護者と子どもの対話が盛り上がりやすいと言われている。

また、保育ドキュメンテーションをうまく活用することで記録時間の短縮にもつながっている園がたくさんあるということである。写真を付けることで文章の説明を減らしたり、園によっては日誌として認めることで新たな負担が増えないように工夫しているところもある。ICT活用を進めている園では、保護者との連絡帳においても写真を活用することで大幅に事務量を減らせている園もあるとのことである。保育者の業務負担軽減が大きなテーマでもあるが、写真付きの保育ドキュメンテーションは、保育の質を向上させながら、業務負担軽減につながる可能性が十分にあると言われている。

大豆生田（2020）は、保育ドキュメンテーションを5つの原則にまとめている。

1. エピソード記録と写真を組み合わせ、保育者がまとめた記録。写真でなくても、イラストや動画でも可。
2. 出来事だけでなく、子どもの具体的な姿、心や育ちが伝わる記録。
3. 保育者だけでなく、保護者や周囲の対話を引き出す記録。
4. 作成を通して、保育者が振り返りや次の計画につながる記録。
5. 保育力を高め、子どもや保育がおもしろいと思える記録。

7. 陶芸教室のドキュメンテーション

ドキュメンテーションとは保育の過程を「見える可」することで、単なる文字だけの保育記録よりも、より伝わりやすい保育記録となるものである。保育者の保育記録でもあるが、印刷して園の壁等に貼りますことで保護者にその日の保育内容を目で見てすぐに理解してもらうことが特徴である。私の勤務校で担当する「コンピュータ・リテラシ」の科目が開講されており、この科目はいわゆる「情報機器の操作」に該当する科目であり、幼稚園教諭の必修科目である。この授業でドキュメンテーションの基本を説明し、ワードを使ってドキュメンテーション作成の練習をしている。ただし、この科目で扱うドキュメンテーションの素材としての写真は、前年度開講の他の科目で作成した「どろだんご」等の写真であり、受講生自身の写真ではないため、ドキュメンテーション作成の練習にはなるが、エピソードが一般的な記述となり、各自が添える文章の工夫には限界がある。

保育におけるドキュメンテーションの意義を考察してきた。これらのことを念頭に置きながら、ゼミ活動として陶芸教室での体験をし、その写真を撮っておくことにより、その場の感動や驚きのエピソードを自分たちの言葉でつづることができ、「コンピュータ・リテラシ」で学んだ基本操作から、さらにドキュメンテーションのテーマの内容に深く取り組むことができるようになる。このように自分たちの体験をエピソードと写真でまとめていくことがゼミ活動で行う陶芸教室のドキュメンテーションの目的である。



図2 学生制作のドキュメンテーション陶芸教室の「完成作品」

陶芸を体験したときに写真を撮り、驚きや感動、学びを具体的に綴ることができるように、保育ドキュメンテーションを作成する学習に取り組んだ。陶芸教室を受講後、大学に戻り、ゼミ活動として写真を使って陶芸教室のドキュメンテーションを作成した例が次の通り（図2、図3、図4）である。

ドキュメンテーションは、カラー出力を念頭に置いて作成したこともあり、本稿に掲載するにあたって、グレースケールにしたため、一部見えにくい部分もあるが、陶芸教室の様子がよくわかるドキュメンテーションとなっている。これらのドキュメンテーションも1コマ90分程度で作成しており、長時間かけなくても作成でき程度にICT操作に慣れ、習熟しつつあることがわかる。



図3 学生制作のドキュメンテーション「制作のコツ」「制作過程」



図4 学生制作のドキュメンテーション「ピザ作り」「窯焼きピザ」

8. 陶芸についての事前学習

貸切バスを使い、本学から三重県伊賀市まで片道2時間程度かけて現地に赴き、陶芸教室を受講することもあり、一日かけた遠足のような雰囲気となっている。2回の陶芸教室を実施してみたところ、事前学習が十分にできていなかったことがあり、来年以降継続して取り組む場合、計画的に事前学習をすることが必要であると考えられる。

事前学習の内容としては、次のような内容が考えられる。

- 陶芸を学ぶ意義
- 陶芸と保育

表2 信楽焼と伊賀焼の歴史と特徴

信楽焼	信楽は琵琶湖の南にあり、約400年間前には琵琶湖の底だったと言われている。この地層からは良質な陶土が取れ、穴窯や登り窯で焼くと、赤い肌等の特有の素朴な味わいが生まれる。農用雑器に始まり、室町・安土桃山時代には茶人や文化人に親しまれて、茶道具に作られるようになる。全国的に有名になっている。
伊賀焼	伊賀焼は山ひとつ隔てた信楽焼の影響を受け、14世紀にすり鉢や種つぼなど日用雑器が焼かれ始める。安土桃山時代には、美濃大名で茶人の古田織部の指導で茶の湯に用いる水差、花入れなどが作られた。この時代の作品は、古伊賀と呼ばれ、緑色のビードロ釉やこげがある。「破調の美」と言われる、形を整えた後に手を加えて変形させる技法も伊賀焼の特色。江戸時代には日常のうつわを中心にやかれるようになり、土鍋の生産が今も盛ん。

表3 焼き物の種類

土器	山から取ってきた粘土をそのまま使い、低めの温度で焼く。現在も植木鉢などが出土で作られている。水を通す。
陶器	陶土（土）が原料。水を少し吸う。磁器よりも低温で焼く。平安時代から焼かれている。厚みがあって素朴な見た目。叩くとコンコンと低い音。
磁器	陶石（石の粉）が原料。白っぽく。光にかざすと透けて見える。つるりとした手触り。水を通さない。焼き物の中で最も固く仕上がる。高温で焼く。江戸時代から焼かれるようになった。叩くとキンキンと高い音。

- 焼き物ができるまでの工程

このような事前学習を通して、短時間の陶芸教室であっても効果を最大化し、学ぶ意義を強調することが必要と考える。

9. 学生へのアンケート

今回、陶芸教室に参加した学生21名（2ゼミ）にアンケートを取り、19名の回答を得た。この学生へのアンケートを集計したところ、次のことがわかった。

（図5）「陶芸教室を一日体験することは貴重な経験だと思う」という問いに対しては、「1. とてもそう思う」74%、「2. そう思う」26%であり、合わせて100%の学生が貴重な体験であると

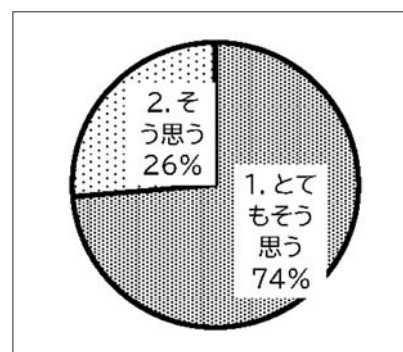


図5 「陶芸教室を一日体験することは貴重な経験だと思う」

感じている。ゼミ授業も通常の時間割では、週1回90分であり、4コマ連続で一日体験授業となるのは特別な形態でもあり、貴重な体験と感じてくれたようである。

今回の陶芸教室では、陶芸だけではなく、陶芸を焼く窯を使って、ピザ焼き体験もすることができた。ピザ焼き体験は、学生がピザ生地の上に、伊賀地元の野菜やソーセージ等のトッピングを自分で盛り付けをして、それを陶芸の先生に窯で焼いてもらうので、学生自身がピザを焼けるわけではないが、手作りの雰囲気のあるピザ焼き体験をすることができた。(図6)「楽しく陶芸の制作やピザ体験ができた」とう問いに足しては、「1. とてもそう思う」74%、「2. そう思う」26%であり、合わせて100%の学生が楽しく体験できたと感じている。

陶芸教室は2021年、2022年と2年継続して実施することができたが、これは同時に2020年4月からコロナ禍により、教育現場ではオンライン授業や分散登校を強いられてきたこともあり、学校行事が大きく制限されてきた。本学でも2020年度の新入生交流会や学園祭は中止になり、2021年度にも学園祭の行事が延期や縮小させられてきた。そのような中で、少人数のゼミによるグループ活動として、陶芸教室を実施できたことは、特に新鮮な空気を感じることができた行事である。

(図7)「コロナ禍のなか、学校行事が少なくなっており、ゼミによるグループ活動をする事ができた」という問いに対しては、「1. とてもそう思う」63%、「2. そう思う」37%であり、合わせて100%の学生がゼミによるグループ活動を評価している

今回はできていないが、(図8)「事前学習をし、陶芸について学んでおくべきだと思う」という問いに対しては、「1. とてもそう思う」32%、「2. そう思う」21%であり、事前学習をしたほうがよいと考えるが学生は約半数の53%である。「3. あまりそう思わない」37%、「4. そう思わない」5%、「5. その他」5%であり、残り約半数の学生が事前学習はあまり必要ではないと考えている。特に「5. その他」での意見としては、「事前学習は必要かもしれないが、実際その場で体験することで学べる事もある。事前に行っているとワクワク感が減る」という意見があり、遠足のように学外に行き現場で初めて体験することに意義があるとする意見もあった。

(図9)「陶芸や粘土のように、指をうごかし、様々な発想を

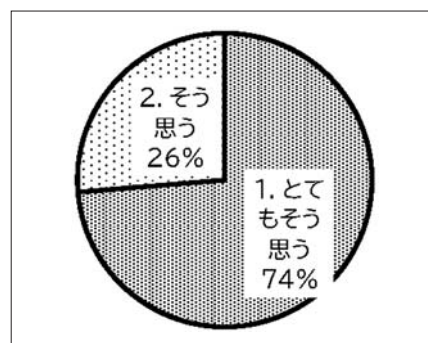


図6 「楽しく陶芸の制作やピザ体験ができた」

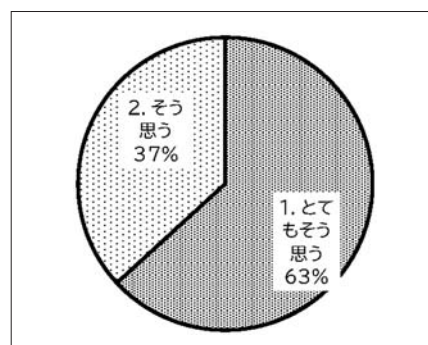


図7 「コロナ禍のなか、学校行事が少なくなっており、ゼミによるグループ活動をする事ができた」

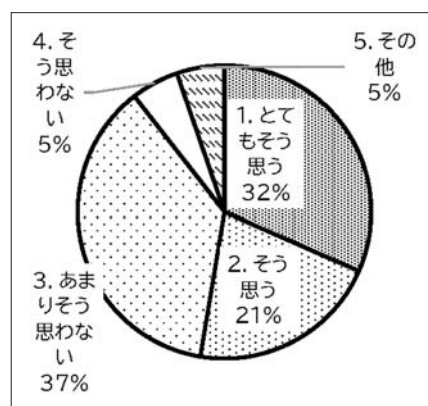


図8 「事前学習をし、陶芸について学んでおくべきだと思う」

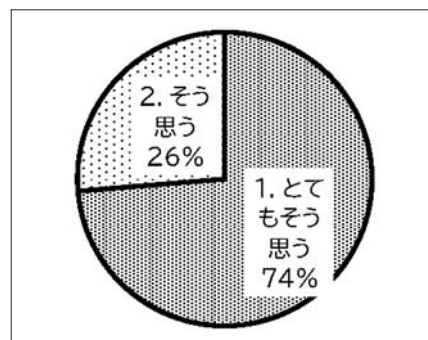


図9 「陶芸や粘土のように、指をうごかし、様々な発想を子どもにとって脳への刺激になると思う」

することは、子どもにとって脳への刺激になると思う」という問いに対しては、「1. とてもそう思う」74%、「2. そう思う」26%であり、合わせて100%の学生が指先を動かす活動が子どもにとって有用であると認識している。

(図10)「できあがった陶芸作品は、満足できるものができましたか?」という問いに対しては、「1. とてもそう思う」58%、「2. そう思う」32%であり、計90%の学生は満足できる陶芸作品ができたようであるが、「3. あまりそう思わない」10%あり、思うように仕上がらなかった学生も10%いるようである。

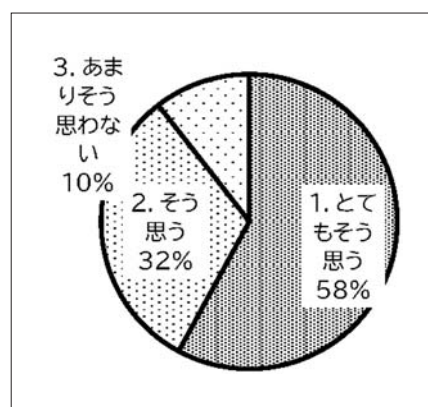


図10 「できあがった陶芸作品は、満足できるものができましたか?」

その他、アンケートでは自由記述の感想で特徴的な意見は次のとおりである。

- 自分で作った作品だったので大切にしたいという気持ちが高まるため、子どもたちにもいい経験になると感じた。
- 初めての貴重な体験ができたと思った。ピザをピザ釜で作るところを初めて見たけれどすごいと思った。
- 思い通りに作るのが出来なかったが、みんなで楽しく出来たのでよかった。
- 不器用で綺麗にできるか不安だったが、自分が想像していたものができてとても貴重な体験ができて良かったし、楽しかった。
- 小学生以降の初めてだったのでウキウキした。
- 一人ひとり頑張って作り上げて、皆の出来上がった作品見るのも楽しかったし、皆思うように作り上げてよかった
- 三重県までみんなでバスで行って、普段はすることができない陶芸という貴重な体験をすることができ、とても楽しかった。
- 陶芸教室に行ったことがなかったのでいい経験ができた。
- 陶芸教室はとても楽しかったが、難しかったと感じた。他の作品の陶芸にもチャレンジしたいと思った
- 中々体験できないことをさせてもらったので、とても刺激になった。今回は、お皿を作ったが、次回また体験できるとしたら、コップを作ろうと思う。
- 中学生の時にも陶芸をしたことがあり、その時は納得いく作品ができなかったが、今回は納得いく作品ができたし、ゼミの交流時間としても楽しんでできたのでよかった。
- 陶芸は何回か体験したことがあり、今まで食器を作っていたので今回はランタンに挑戦して難しかったが、とてもいい作品になり、思い出になった!
- 陶芸教室を受けてどんな形にするのか想像しながらするのがすごく楽しかった。
- みんなで陶芸できて楽しかったし、ピザも美味しかった♪
- コップ作りをはじめてやってみて、楽しかった。飲むのが楽しみ。

10. 今後の課題

現在、陶芸教室は2年目であり、教育活動として継続していきたいと考えている。本学ゼミ教員の協力を得ることで、将来保育者となる学生が陶芸教室を受講する意義、保育環境において、土、粘土、砂を使って造形活動や感触遊びを高めることを考察し、保育において陶芸を学ぶ目的を深めていきたいと考えている。

今回は、造形活動や保育環境との関係において、陶芸活動についてまだまだ十分に考察できていないので、それらを研究することについては今後の課題としたい。

また、来年度には陶芸教室を受講するにあたって、事前教育を準備して実施することで、陶芸を学ぶ意義を深めていけると考えている。また粘土遊びや陶芸を保育に取り入れている園に見学に行くなど、今後も陶芸を学ぶ意義を追求していきたい。

<参考文献>

- 成田孝（2008）『発達に遅れのある子どもの心おどる土粘土の授業』 黎明書房
- 新見俊昌（2010）『子どもの発達と描く活動—保育・障がい児教育の現場へのメッセージ』 かもがわ出版
- 牧野昇ほか（1992）『江戸時代 人づくり風土記 24 三重』 農山漁村文化協会
- 谷本光生（2009）『伊賀焼—伊賀の七不思議』 誠文堂新光社
- 浅海真弓（2009）「陶芸学習における「導入プログラム」の開発と実践について」（美術教育学：美術科教育学会誌 30
- 白石淑江（2018）『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用』 新評論
- 白石淑江、水野恵子（2013）『スウェーデン 保育の今—テーマ活動とドキュメンテーション』 かもがわ出版
- 大豆生田啓友、おおえだけいこ（2020）『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館
- 伝統工芸のきほん編集室（2017）『伝統工芸のきほん1 焼きもの』 理論社